



地人館  
E-books

デモ版 pdf

山河を越えて 心のガイドブック

観音霊場巡拝記 2

西国三十三札所

酒本幸祐 著



## 酒本幸祐さんの巡拝記——刊行にあたって 地人館代表 大角修

酒本幸祐さんは六月書房という出版社の社長をしながら、故郷の四国八十八ヶ所をはじめ、あちこちの寺社詣でを欠かさない。2004年4月には、西国・坂東・秩父に加えて鎌倉三十三観音巡拝の記録『菩薩の風景 日本百観音霊場巡拝記』を上梓された。本書はそのなかの坂東巡礼の部分を再編集したものである。

ところで近年、靈感スポット、スピリチュアル、御朱印集めといった言葉とともに、寺社参りの人気が高まっているという。観音札所についても、各地の霊場会のサイトをはじめ、各種の旅行ガイドブックなどで盛んに紹介されている。にもかかわらず、もう20年も前に刊行された観音霊場巡拝記を再刊したのは、昔から庶民の楽しみだった「信心の旅」の感覚がよみがえるように思われたからである。

酒本さんは古い友人であるが、とりわけ信心深いようでもなく、何か特定の信仰をされているわけでもない。そんな強い信仰ではなく、素朴に神仏に礼拝するところに味わいがある。

たとえば、「第十四番 瑞応山弘明寺」の項に次のようにいう。

「堂内外陣で参拝したが、本堂の奥に身丈六尺の十一面観音像を見ることができた。本尊が見え

るということは、凡夫にとつて実に嬉しくありがたいもので、読む経にも必然力が入る。巡拝二日目の無事を願ひ、結願、諸願の成就を祈りつつ経を読んだ」

また、「第二十三番 佐白山正福寺」の項に次の文がある。

「本尊の前に坐して読む経は、いつものことながらありがたい、観音様へすつと思いが伝わるようだった」

この「諸願成就を祈りつつ」「ありがたく、観音様へすつと思いが伝わるようだ」といった感覚を近年流行の寺社参りの人はもつことができるだろうか。観音堂の前で撮ったVサインの写真をメールで送る世代には、もしかしたら、消えてしまった感覚かも知れない。といって、霊的なものへの関心は消えない。昔は庶民の健全な娯楽だった寺社参りから「もつたいない」「ありがたい」という素朴な感覚が失われたとき、その心の空白に靈感とか怨霊とか、カルトの恐怖がしのびよってきても不思議ではない。

この不安の時代に酒本幸祐さんの巡拝記は、ほどよく信心深くて貴重なものである。



**第八番・豊山長谷寺** 長谷寺周辺は坂の町で門前町も坂の中にある。長谷寺本堂は、山門からつづく回廊形式の登廊を登りきったところにある。写真は登廊。



**第九番・興福寺南円堂** 南円堂は奈良公園にある興福寺の一堂。不空羅索観音菩薩像を本尊とする。興福寺には多くの観光客が訪れるが、南円堂には観音信仰を目的とした人が目立つ。観光寺の中にある信仰の寺といった趣があるのだろう。



**第十三番・石光山石山寺** 石山寺は観光寺で多くの観光客で賑わっている。写真の仁王門は、屋根の勾配や張り出しが洗練されていて立派で美しい。また門前に吊るされた、「石山寺」と墨書した白張りの大提灯が印象的である。この仁王門は源頼朝の寄進だという。



**第三十三番・谷汲山華嚴寺** 華嚴寺の仁王門には写真のように「南無十一面観世音菩薩」と書いた大きなのぼりが立っている。また明治初期に再建された本堂は間口二十メートルの堂々たる構えである。なお、本堂参拝後に、本堂裏手にある満願堂を参拝すると「満願成就」となるという。



西国三十三観音朱印帖





西国三十三観音朱印軸

## 西国札所巡礼へ

日本最古の観音霊場「西国三十三観音」巡拝を思い立ったのは、秩父三十四観音霊場巡拝を結願したことによる。秩父観音霊場巡拝で感得した、観音様のやさしさに触れたからでもあった。今回、日本三大観音霊場の秩父、西国と巡拝したのだから、願わくば坂東三十三観音霊場巡拝を達成し、百観音巡拝の結願を果たしたいと願っている。その意味からも観音様のご加護を切に祈る心境である。不思議なもので、観音霊場に先立って巡拝した四国八十八ヶ所霊場などを廻って思うことは、巡拝したいという自分の意志の他に、その巡拝を可能として下さる神仏の加護というものを感じることもある。人の命や、人の運命のはかなさ、危うさをも知らされることとなる。さて、観音霊場と、西国三十三観音霊場について、手短かに記しておく。

観音霊場が三十三である由縁については、『秩父三十四観音霊場巡拝記』でも書いたが、『妙法蓮華経観世音菩薩普門品』れんげきようかんぜおんぼさつふもんぽんでは、観音様が人それぞれの境遇に合わせて、その人が一番理解でききる姿で現れ救って下さるということである。三十三応現身といわれ、三十三に姿を変えて現れるということであるが、この三十三の数字は、広大な無限という表現でもある。

西国三十三観音霊場の発生は平安時代といわれている。深山幽谷で修行し、名山霊場を廻る

聖<sup>ひじり</sup>たちによつて一部の観音霊場が成立し、旧来からあつた観音霊場が合わさつて、現在の西国観音霊場の原形になつたといわれている。この霊場を整備し再興したのが花山法皇（九六八—一〇〇八年）であるといわれている。ゆえに西国三十三観音霊場の中には、花山法皇と縁の深い寺が番外として二ヶ寺含まれている。

西国三十三観音霊場のエリアは広範で、その中心は京都府にあるが、和歌山県の青岸渡寺<sup>せいがんとじ</sup>から始まつて、大阪府、奈良県、兵庫県、滋賀県、岐阜県の谷汲山華厳寺<sup>たぐみざんけごんじ</sup>までである。この後、一般的には日を改める場合も多いが、長野県の善光寺<sup>ぜんこうじ</sup>へと巡拝する。一番の青岸渡寺から、三十三番の華厳寺まで、実質距離は約千六百キロであつた。出発点から青岸渡寺、華厳寺に善光寺までの距離を加えると二千キロは楽に超える長丁場であつた。よくぞ広範に霊場を展開したものだといふのが、巡り終えた印象であつた。

また、三十三ヶ寺の他に番外と呼ぶ寺がある。一般的なガイドブックでは、西国三十三観音霊場の番外は三ヶ寺。その一つは法起院<sup>ほうきいん</sup>で、長谷寺の開基者で西国霊場の開基者でもあるといわれる、徳道上人の廟所<sup>びやうじよ</sup>がある寺である。徳道上人の後、花山法皇が西国三十三観音霊場を再興したといわれていて、残りの二ヶ寺は元慶寺<sup>げんけいじ</sup>と花山院<sup>かざんいん</sup>。元慶寺は花山法皇が出家した寺、花山院は花山法皇の廟所がある寺であり、番外三ヶ寺は西国観音霊場の成立に縁の深い寺といえる。

ところがである。霊場巡拝で大きな意味をもつ朱印帖<sup>しゆいんちゆう</sup>には、番外三ヶ寺の他、大阪の四天王寺<sup>してんのう</sup>、和歌山の高野山<sup>こうやざん</sup>、長野の善光寺のスペースが設けてあつて、合計三十九ヶ寺を巡拝するよう

にできている。掛軸の方には番外の法起院のスペースはない。結局スペースが設けられている以上、それらにも朱印をいただかなければ空白となり、巡拝結願達成といった感じがしない。ことに掛軸の場合はなおさらである。巡拝用の朱印帖も掛軸も数社の業者が作っているものであるが、その理由は巡拝しながら考えることとする。三十三ヶ寺だけのものもあるらしいが、我々が持参した掛軸は法起院のみ抜けたもので、徳道上人には失礼ながら三十八ヶ寺の巡拝となった。

四月十一日夕刻、羽田空港より南紀白浜行きの飛行機に乗って、西国三十三観音霊場巡拝の旅がスタートした。暖かい春で、桜は散り葉桜に送られての出発であった。旅の始めは気持のよい緊張感がある。

今回同行してくれるのは、四国八十八ヶ所霊場巡礼の時、名先達をつとめてくれた徳島市在住のOさんである。彼は瀬戸内海を渡り陸路車を走らせ、南紀白浜で私と合流することになった。四国は手の内の彼も、西国巡拝は初体験であり、頼りとするのは車に装備されているカーナビであった。

南紀白浜空港に着陸すると外は雨。旅の前途を祝福してくれる春雨であると理解した。

到着後、Oさんと携帯電話で連絡をとると、到着が遅れるとのこと、私が宿探しをすることになった。南紀白浜は温泉の町としても有名であるが、霊場巡拝を前に温泉に入ることは畏れ多いと見送った。地理的に分かり易いということで、ビジネスホテル白浜、一泊四千五百円に決め

た。値段が示す通りそれはそれは古びたつましいホテルであった。

合流したOさんと二人、冷えたコンビニ弁当で遅い晩めしを食べ、早々に寝ることにした。明日の青岸渡寺以降の距離を考えると、早朝四時半の出発である。和歌山県の札所は四ヶ寺であるが、寺と寺の間が長く移動時間が大変である。巡拝におけるスケジュール設定は、全て冷静沈着なOさんの指示である。

西国三十三観音霊場巡拝への出発前夜、実にふさわしい宿であり食事であった。南無観世音菩薩。この旅の無事と結願を祈りつつ眠った。

#### 四月十二日。巡拝一日目。早朝のみ小雨。

予定通りの午前四時三十分ホテル出発。二人とも背に南無観世音菩薩と書いた白衣に輪袈裟わげさ、金剛杖こんごうづえの霊場巡拝装束である。早朝だというのにホテル経営の老夫婦は、今日が私たち二人の西国霊場巡拝の初日ということを知っていて、二人で見送って下さった。

青岸渡寺への道は、右手の太平洋に付かず離れず、ゆるやかな登り下りの起伏に富んだもので、登り切った道から一望に広がる海が見えると、実に爽やかな気分となる。青岸渡寺のある那智勝浦まで国道二四号線を一筋の道である。

熊野の深い山を源流とする川が幾筋も海に注いでいて、それらに架かる橋を渡り進むのだが、

青岸渡寺への半ばを過ぎた頃、古座川コサガハに架かる橋を渡った。河口に近く広い川で、川を挟むように川筋に沿って民家が奥へと広がっている。落着いた家並で、どこか日本のふる里といった感じがした。その時、運転中のOさんが「トラさんがいそうですね」といった。唐突のことで一瞬意味を理解できなかったが、「ああ寅さん」とその意味が解ると、「全く」と相槌を打った。フーテンの寅さんの映画に出てくる風景そのものであった。

早朝のため車も少なく、順調に進んでいたが、右手に捕鯨トウジで有名な太地町を過ぎ、那智勝浦までは数キロという時点で大きな勘違いをすることになった。道路表示に、那智の滝左折と書いてある。青岸渡寺は那智の滝でも知られる寺であり、そのことを予習しているOさんは、すかさずハンドルを左に廻した。カーナビを無視してである。カーナビは原則として運転者の意思を優先する。道があるかぎり、運転者の意思に合せて道を探す。左折したとたんカーナビは、那智の滝に向かって、くねくねとした山間の一本道を画面に表示した。あとは画面に従ってひたすら走るだけである。

カーナビの指示に従って走るほどに、道は険しくなってきた。山間部に入ると林道のように、ワゴンタイプのOさんの愛車のボディに、道脇の小枝が当たるほどである。登り坂も急になり、対向車が来れば行き違えないほどである。

青岸渡寺は那智の滝でも有名な寺であり、大型の観光バスも来るだろうから、私はこの道は違うと確信して、そのことをOさんに伝えた。Oさんも気付いているのか、引き返すことをためらっ

てもいるのか、私の話に耳をかさない。カーナビは相変わらず山道を示している。

〇さんは黙したまま運転を続けているが、林道を登り切ったところに、木造で半分壊れかけた料金所があった。勿論、人はいないが、那智山スカイラインと書いた木製の看板が傾いてかかっていた。

那智山スカイラインに出ると、一瞬に展望が開け、眼下に低い山並が見え、その向こうに太平洋があった。苦勞して林道を抜けただけに、景観の美しさに救われたが、〇さんは無言である。スカイラインは下りで、道脇には小さな集落があったり、分校のような学校もあった。

一時間余りの山中のドライブであった。我々が青岸渡寺の駐車場に入ると、行き違いに、前に「那智勝浦駅行」と表示した大型乗合バスが反対の方に出て行った。この時点で我々が通つて来た道は、もはや一部の人しか利用しない脇道であったことを、二人して同時に悟ることになった。その後、青岸渡寺の納経所に行った〇さんは、「あの道は景色がよかったです。でもここから大きな道を下ると勝浦駅までは五分ですよ」と寺の人に聞かされて、冷静沈着かつプライドの高い彼は大きなショックを受けてしまった。そのショックは旅の終りまで脳裏にあったようであった。

白浜のホテルから青岸渡寺までの走行距離は百三十一キロ。遠廻りした距離は三十キロ前後であるが、時間的には一時間余りになる。

# 第一番 那智山青岸渡寺なちさんせいがんとし

和歌山県東牟婁郡那智勝浦町那智山八

天台宗

本尊・如意輪観世音菩薩

創建・三一三〇三九九年

開基・裸形上人

早朝に出発したこともあつて、青岸渡寺には八時前に着いた。青岸渡寺は、和歌山県下の寺と寺の間の長さを考慮して納経所開門が早い。駐車場から長い石段が続く表参道を登る。両側に並ぶ土産物屋も表の戸は開いているが、営業前である。店先には名産の那智黒石の装飾品や碁石を売っているのが目立つ。参道を掃除中の地元の人とあいさつを交しながら登るが、この石段が思いの外に厳しい。登りつめたところが左右に分岐していて、左手に朱塗りの大きな鳥居、その奥にこれも朱塗りの立派な本殿前の門が見える。熊野那智大社である。右手の石段を登り切ると境内の奥に、豊臣秀吉とよとみひでよしの再建になる、檜皮葺き入母屋造りの立派な青岸渡寺の本堂が見える。



神社と寺院が向い合って建っているが、これは那智山が神仏習合の権現信仰の霊場であり、熊野三山の一つで、修験道場であったことを伝えるものである。明治の神仏分離によって、現在の構成となった。いずれも熊野の深い森を背景として、那智山の中に並んでいる。

納経所は本堂内部にあり、本堂に入って参拝する。西国巡拝の無事と心願成就を願って、般若心経を唱える声にも力が入る。天井が高く歴史を感じさせる堂内での読経は、長い歲月の中で幾多の人が同様に経を読み、諸願の成就を願ったことであろうと、そんなことも連想させた。

西国三十三観音霊場は日本最古の観音霊場だけに、青岸渡寺以降のどの寺も創建は古く、名刹、古刹、大寺の連続である。

参拝を終え、本堂裏手の境内へ進むと、何度も写真で見慣れた風景に出会う。手前に朱塗りの三重塔、遠景に新緑の山並、その中に白い糸のように那智の滝が落ちている。絵葉書のように、美しくはあるが整い過ぎた景色である。境内から滝までは距離があり、滝音を聞くことはないが、音もなく白糸を引くように落ちる滝が御神体であることに納得する。

葉桜や青岸渡寺の滝しぶき

誇張も交えて、一句を物して青岸渡寺を後にした。

行きはOさんが道を間違えてショックを受けたが、帰りは五分で道を下り切ると、国道二四号

線に出て、朝に通った道を戻るように走る。すっかり空は晴れ、今度は左手に明るい太平洋を眺めながら走り続ける。今朝通った太地町を過ぎ、寅さんがいそうな古座川を渡り、水中展望台で有名な串本辺りで遅い朝食をとる。水中展望台は有名なだけに興味はあったが、引潮の中で沖に伸びる栈橋、コンクリート造りで、海から突き出た円柱の展望台の外観は心淋しいものがあつた。

朝食はきつねうどんと名物サンマ寿司。和歌山に來ればサンマ寿司は食さねばいけない。食堂脇の小屋掛けの物産売場では、サンマの丸干しが売られていた。サンマの丸干しは、油が少ない若魚のサンマでしかできない。故に丸干しサンマはこの地にしかない、手拭いをかぶった老婦人は説明をした。一瞬、購入を考えたが今日が巡拝の初日であることを思い見送ることにした。

朝食を短時間で済ませると再び出発。和歌山の札所は寺と寺の間が長いと聞いていたが、実感する。未だ今朝出発した白浜まで戻っていない。白浜を通過して、二番札所の金剛宝寺こんごうほうじ（紀三井寺きさい）までの中間地点である。田辺、御坊、有田と聞き覚えのある地を過ぎる。いつしか左手の海は紀伊水道へと移っていく。地図で見れば、対岸は四国の徳島であるが、見える訳はなくデコボコとした岩場が続くだけである。海南市を通り、和歌山市街に入る寸前を左折すると、明らかに寺名が地名となつた紀三井寺町に入る。

余談だが、西国霊場では大半が寺名からとつた地名と分かる。創建が古いだけに、寺ができてから町ができたということであろう。当り前のことを書いたが、西国霊場の寺の多くは、それほど古いと言いたかつたまでである。

余談ついでにもう一つ。観音霊場に限らず、札所寺院には御詠歌ごえいかなるものがある。寺名や地名、所在の名山や景観を折り込んで作ったもので、読むたびに上手に作ったものだと感心はするが、どこか無理やりありがたさを押しつける印象もある。その点で西国観音霊場札所寺院の御詠歌は、実に雅である。このへんにこの霊場の懐の深さを感じる。三つほど例に挙げると、

ふるさとをはるばるここに紀三井寺

花の都も近くなるらん 二番・金剛宝寺（紀三井寺）

深山路みやまじや檜原ひばら松原わけゆけば

巻の尾寺に駒ぞいさめる 四番・施福寺せふくじ（槇尾寺まきおでら）

後の世のちを願うところはかろくとも

ほとけの誓いおもき石山 十三番・石山寺

書けばきりがなく、マイツタカと言った感じである。

## 第三番 風猛山粉河寺

ふうもうざんこかわでら

和歌山県紀の川市粉河二七八七

粉河観音宗

本尊・千手千眼観世音菩薩

創建・七七〇年

開基・大伴孔子古

おわたものくしこ

門前に車を止め、大門をくぐり中に入ると、手入れのいい公園かと思うほど広々とした境内がある。平坦で新緑が美しく、境内地がどこまでも続く感じである。実に大寺、寺歴を見るまでもなく悠久の歴史を有する寺であることは感得できる。名刹とはこのような寺を指すのであろう。

境内に幅広く敷かれた石畳の参道を進むと、左手に立派な手水舎、その奥の境内地より十数段ほど石段を登ったところに、舞台造りの豪壮で落ち着いた中門が見えてくる。再び中門をくぐると、石畳の参道奥にある十数段の石段上に、立派としか表現できない、お城の天守を思わせる複雑に入り組んだ屋根をもつ本堂が見える。専門的には八棟造りというのだそうだが、あまり見ない建

築様式である。

紀ノ川左岸の山裾にある寺だが、広大な敷地はほぼ平坦で、その中にゆったりと寺院の伽藍が配されていて、実に美しく整った寺である。古くは清少納言も「寺は石山、粉河……」と称するほど壮大で美しかったのであろうが、豊臣秀吉に焼かれてしまい、現在の本堂は徳川吉宗の尽力で再建されたという。

さて、ご本尊の千手千眼観世音菩薩像は大きな本堂の中にいらして、本堂軒下で参拝する我々からお姿を見ることができない。ここは般若心経を唱えながら心眼で見て、心願成就を願うことにした。

ともかく歴史のある寺だけに、寺の縁起や伝説も多彩なものがある。左甚五郎作の「門前の虎」の話など、挙げればきりが無いといった感じで割愛させていただく。ただ観音様の化身の伝説は有名で、古より観音伝説の聖地であったことは確かだ。

なお、フリー百科事典・ウィキペディアの粉河寺の歴史には、〈河内国の長者・佐太夫の娘は重い病で明日をも知れぬ命であった。そこへどこからともなく現れた童行者が千手千眼陀羅尼を唱えて祈祷したところ、娘の病は全快した。喜んだ長者がお礼にと言って財宝を差し出すと童行者は受け取らず、娘の提鞞（小太刀）と緋の袴だけを受け取り、「私は紀伊国那賀郡におります」と言って立ち去った。長者一家が那賀郡を尋ねて行くと、小さな庵に千手観音像が立ち、観音の手には娘の提鞞と緋の袴があった。長者一家は、あの行者が観音の化身であったことを知ってそ

の場で出家し、孔子古とともに粉河寺の繁栄に尽くしたとのことである。〳との記述がある。

ここにも俳聖芭蕉ばしょうの句碑がある。

ひとつぬぎてうしろにおひぬころもがへ

字余り。俳聖の句は実に難しい。

粉河寺を辞した二人は、再び紀ノ川沿いを上流へと車を走らせる。橋本から弘法大師こうぼうだいしのおられる高野山へと一気に山を駆け登った。

この橋本は、その昔遊郭があったことでも知られ、紀ノ川を上り下りする商人や、船頭衆にまじって、頭巾を被った僧侶の姿もあったのではないだろうか。

高野山の麓の辺りは柿の名産地で、美味しい富有柿ふゆうがきで知られている。車窓から見える段々畑で斜面地の畑には、丁寧に整枝され剪定された枝に、柿が葉のもつ独特の新緑が美しかった。

車は高野の坂をエンジン音も高く登っている。運転中のOさんの脳裏には、金剛峯寺こんどうぶじの納経所閉門時間がインプットされているはずである。

一も二も弘法大師を敬愛する私には、うなるエンジン音も「南無大師遍照金剛」と聞こえてくる。これまで幾度高野山に登ったことであろう、その都度感じることは、ふる里へ帰る、といったうれしさである。西国観音霊場出発の時、高野山が番外に入っていることをOさんから知らさ

れた時、小踊りしたい気分であった。

坂を登り切り、山頂部に抜かれた高野山の町中に入る。細長く構成された町の、その中心に金剛峯寺がある。その門前の大駐車場に車を止めると、午後四時三十分前。今朝からの走行距離は三百九十一キロであった。

## 番外 高野山金剛峯寺

こうやざんこんごうふじ

和歌山県伊都郡高野町高野山一三二

高野山真言宗

本尊・大日如来

創建・八一六年

開基・弘法大師

門をくぐって玉砂利の敷きつめられた境内に入る。その正面に檜皮葺きの本堂が美しい。境内地を囲んで杉の大木があるが、境内にはほとんど植栽はなく、玉砂利と、境内を歩むための石畳の通路があるだけで、広々とした空間が広がっている。本堂も檜皮葺きの大屋根を支える柱と白壁、障子のみで、全く装飾のない質素な中に、高貴な美しさを示している。京都の東寺とうじの雰囲気

を思い出した。東寺も弘法大師ゆかりの寺である。

本堂右脇の寺務所で納経を終えると、金剛峯寺を出て、弘法大師のいらっしやる奥之院へと向かった。数分走ると奥之院前の大駐車場に着く。



この細長く造られた高野の町は、金剛峯寺を中心に、多くの塔頭たっちゅう寺院があり、商家や民家、役所、大学などがある。山頂部に抜かれた仏都、高野山真言宗の聖地といった思いを強くする。弘法大師は、千二百年余の昔、今日の聖地を想像されていたのであろう。そう考えることで、この町の成立が無理なく理解できる。

奥之院入口の染井吉野桜が枝いっぱい満開であった。やはり山頂に広がる高野の町の春はゆつくりなのである。午後五時を過ぎて、暮れかかる中で見る桜は、その周辺がほのかに明るく、幽幻さを感じる。夕暮に見る桜は大きな魅力である。

参拝者がまばらになった石敷の参道を奥之院へと歩む。樹齢二、三百年といった杉の大木が、参道を埋め尽すように群立するその下に、戦国時代の武将や江戸時代の大名たちの墓が並んでいる。かつての恩讐を超えて、弘法大師の廟の前に在る姿は、「人は大日如来より生まれて大日如来に帰って行く」というお大師さまの言葉を具現しているようだ。

心静かにして般若心経を唱え、西国三十三観音霊場巡拝の無事結願を願った。

ところで、なぜ金剛峯寺が西国観音霊場の番外として含まれているのだろうか。金剛峯寺の本尊は大日如来であり、観音信仰とは直接関係がない。どうやら、このことは大師信仰にあるように思える。西国観音霊場は、青岸渡寺から始まり、紀三井寺、紀ノ川を遡って粉河寺へと巡る。ここからは高野山を遠望することができ、大阪の施福寺せふくじへ行く前に、少々厳しいが途中でもあり、廻り道をして高野山に登りたいという思いが、いつしか番外の寺として定着したのではなからう

か。そんな気がする。

再び車を走らせ始めた。初日の巡拝は終了したが、明日一番に訪ねる札所参拝のためには、高山に留まることは許されぬ。巡礼者は朝一番に参拝する寺の門前に、午前八時に立つことがルールである。これはOさんのルールでもある。そこで山を駆け下りると、七十キロほど走り泉佐野に泊まることにした。ホテル到着午後八時。本日の全走行距離四百六十八キロ。ささやかなアルコールに誘われて、またたく間に夢の中の人となる。

#### 四月十三日。巡拝二日目。晴。

昨晩に施福寺の近くまで距離を稼いだこともあって、「明日のホテル出発は七時にしましょう」とOさんの指示で、いく分楽な出発となった。といつても四番施福寺までは四十キロほどであった。

施福寺は通称槇尾寺と呼び、この名前の方が通りがよい。弘法大師が、都の大学を退め、剃髪出家した寺として有名である。この地名も寺名から由来した槇尾山町という。

この辺りも大阪湾沿いから内陸部へと住宅地が広がり、槇尾山の山裾まですっかり開発が進んでいる。その町外れから三キロほど山路を登った所に槇尾山の入口がある。道に迫り出すように杉や檜が茂り、深山へと進む感がある。横を流れる沢に沿って、今を盛りの山吹の黄色の花が鮮やかであった。

## 第三十三番

たにぐみさんけごんじ  
谷汲山華嚴寺

岐阜県揖斐郡揖斐川町谷汲徳積二二三

天台宗

本尊・十一面観世音菩薩

創建・七九八年

開基・豊然上人／大口大領

不思議なことに、この三十三番札所だけが、西国三十三観音霊場の中でポツンと離れてある。彦根から高速道路に乗り、名神高速道路の関ヶ原から、大垣を抜けて岐阜県の山中にあるが、その理由は寺伝に詳しい。

寺伝では、会津に住んでいた開基者の一人、大口大領が観音堂の建立を思いたち、文殊菩薩に祈って榎の霊木を授かった。その霊木を京に運び、仏師に十一面観音像を彫ってもらい、その像を持ち帰る途中、美濃に来ると重くて動かなくなつた。観音像に理由を聞くと会津まで帰りたくない、ここから北へ五里の山中で衆生の済度をしたいということで、山中に入るともう一人の開

基者である豊然上人と会い、二人で堂を建てたのが華嚴寺の創建だという。

山中にある寺を想像していたが、意外に華嚴寺は平場の寺であった。仁王門に続く門前の参道は桜並木の美しい幅の広いもので、両側には土産物屋、食堂、掛軸屋と大変な賑わいであり、しみじみ結願の寺を感じさせてくれる。

運慶作と伝わる仁王像のある門を入ると、本堂へと石段が続く。左右には結願お礼の「南無十一面観世音菩薩」と書いた、大きなのぼりがビッシリと並んでいる。

本堂は明治初期の再建になる間口二十メートルの堂々たる構えである。本堂内に入って、前立ちの十一面観音像に向って、結願のお礼、心願成就、そしてこれまで廻った寺々を思い出しながら、般若心経をゆつくりと七巻唱えた。無事ここに立てたことが、しみじみありがたかった。

いつものことであるが、結願の寺は参拝が終つても去り難いものである。本堂内を歩いたり廻廊を廻ったり、なごりおしいのである。

その時、地元の五十半ばの四人組の婦人達と出会った。気軽に声を掛けてくれ、「満願堂へは参ったかね」という。満願堂の存在を知らない我々に、「満願堂を参らなければ意味がない」といつて先頭に立ち案内してくれた。満願堂は本堂の裏手にある小さな堂である。ご婦人たちと勝手に中に入り、等身大の木造の本尊と握手をし、私が先達で経を読んだ。「これで満願成就です」と読経が終ると婦人たちは笑顔で祝ってくれた。

無事三十三番札所を巡拝し、駐車場に着いたのが午後四時であった。安堵感、充実感、うれし

さが込み上げてきた。しかし我々はこの後、長野の善光寺に行くのである。Oさんがカーナビに善光寺をインプットすると、走行距離三百四十キロと表示された。Oさんは頭を抱えて座り込んでしまった。若い彼も疲れているのであった。しばらく沈黙があったが、行けるところまで行きましよう、彼は車のエンジンをかけた。

中央自動車道に乗ると、長野を目指して闇の中をひたすら走った。午後八時を過ぎた頃、もうホテルを探そうよと、二人の意見は一致。飯田インターで降りると、幸いにすぐビジネスホテルを発見した。無事の結願を祝って二人で乾杯、遅い夕食となった。「明日は午前七時三十分の出発にしましょう」。Oさんの指令でお開きとなった。

#### 四月十九日。巡拝八日目。快晴。

再び中央高速に乗って、車は快調に走る。天気は快晴。しみじみと観世音菩薩のご加護を感じている。

長野市に近づくにつれ、車窓から北アルプスの山頂部に残る残雪が美しく見えてきた。道路脇の桜は五分咲きである。長野市では三分咲きだった。長野の春は遅いのである。

ついに善光寺門前の駐車場に入った。仁王門の前に立つと、いままで何度か善光寺を訪ねたが、今回は感慨ひとしおである。仁王門をくぐり賑やかな仲見世通りを抜け、善光寺本堂へと進む。

実に立派な本堂である。本堂前では通りかかった僧にお願いして記念写真も撮った。牛に引かれなくとも、やはり善光寺には来るものである。

広い本堂内は畳敷きで、畳の上に座ってゆつくりと般若心経を読む。うれしさが心の底から湧いてくるようだ。

納経も終え、本堂を出ようとすると、寺の職員が、「本尊様のカギは触りましたか」と聞く。そのカギというのは、本尊の祀られている厨子の真下にあるということで、再び本堂に入った。

内々陣の戒壇めぐりの階段を下りると、中は真暗で、手探りで前方、左右の壁を確認しながら進むと、本尊の真下に掌に余るくらいの錠前があった。これだと、何度も何度も握りしめて、戒壇を出た。結願のイメージだけでなく、こうして物に触ると、よりありがたさが増すから不思議である。

寺を出ると仲見世の茶屋に入って、Oさんとゆつくり茶を飲んだ。二人とも言葉少ない。決して不機嫌なわけではない。言葉がないのである。

ゆつくりと茶を飲みながら、しみじみと西国三十三観音霊場巡拝を思い直していた。青岸渡寺から始まった八日間の巡拝の旅は、長くて、ハードで、ありがたかったのである。

ようやく腰を上げ、西国三十三観音霊場の土産に、信州名物の塩羊羹を求めた。それら土産物を手にして駐車場へと歩み、荷物の整理をした。

私は長野駅から新幹線に乗って帰京するのであるが、Oさんは高速道路を乗り継いで、四国徳

島まで帰るのである。そのことを思うと申し訳ない気持ちでいっぱいであった。

長野駅前でOさんと別れた。「気をつけて帰って下さい」と言葉を交した後、車は元気に走り去っていった。その車に向かって、帰路の無事を祈り、南無観世音菩薩と唱えて見送った。



地人館 E-books オンデマンド版  
紙面のイメージは電子版と異なります。

---

## 酒本幸祐 (さかもと こうすけ)

---

- 948年 徳島県生まれ。  
1969年 大阪府立八尾高校卒。  
1970年 東京の小出版社勤務。  
1978年 美術誌発刊のため出版社六月書房を設立。  
1983年 霊園情報誌『霊園ガイド』を創刊、今日に至る。

以降、霊園ガイドへ掲載のため全国の霊場、社寺の取材参拝を続けている。主に、四国八十八ヶ所霊場、秩父三十四観音霊場、西国三十三観音霊場、坂東三十三観音霊場を巡拝し百観音巡拝を達成。他に鎌倉三十三観音霊場、みちのく三十三観音霊場など、社寺巡拝は多く、近年は修験道に関心を持ち、かつて修験道の盛んだった社寺を中心に取材参拝を続けている。

---

## 観音霊場巡拝記 2 西国三十三札所

---

著者 さかもとこうすけ  
酒本幸祐

初版発行 2021年7月26日

発行 ちじんかん  
地人館

〒116-0014 東京都荒川区東日暮里 6-56-6 長戸ビル 3階

Tel 03-6806-7937 Fax03-6806-7939

<http://chijinkan.com/>

印刷・製本 有限会社 朋栄ロジスティック

©2021 Kousuke Sakamoto